

繪本更科艸帑後編

卷之三

特  
覽 13  
977  
8



門 18  
第 977  
卷 8



勇婦 全傳 繪本更科草紙後編卷之三

遠州小夜中山麓 栗杖亭鬼卯著

鹿之助早川鮎之助が逢横道兵庫之助と助る話

尸子曰為人臣者以進賢為功為人君者以用賢為功宜成哉  
山中鹿之助ハ中御門中納言宗教卿のたのまに於て不斗也  
尼子義久おまゝうい自臣下と有りて生涯忠臣を音と一干  
辛方苦の中々志と翹うも寔は天下の豪勇と後世筆に傳る  
も一言の義より身よりゆかり扱も山中鹿之助ハ直小三條通  
の菊酒屋へ歸る菊の事の一と物語自色紙の連い  
晴ぬればはなごい中納言のたのまを金鉄のてく受引西国  
へ趣んとかかりたりと菊も大ふり修ごい路用の黄金之

勇婦全傳卷之三

かゝ次持で行末のりて約して別まき多々夫より鹿之助ハ  
 都と跡ふたゝ桂川と打涉り芥川より播磨の街道へ  
 さゝかゝる多敷幅二間むらうもわらんと思ふ急流乃川  
 りり此川と涉り跡と歸るれば流水逆しく岡へ上るら  
 不思議に見るうら川下より一人の男長二間はうりも  
 りんと思ふ板ともく水と川上へ押戻るに彼ら快力  
 水はあゝくく岡へ溢る瀬に住鮎の畑中へ押上らまへん  
 りんと踊る事哉千とりりりともく此男よ程かゝ  
 鮎と拾ひ籠り納り又川上へ押登ると鹿之助此男  
 の大カ小恐まるとしてわらわら声をかけ足下小物りりの暫  
 休むへとつゝ彼男も打笑ひる傍の隈に腰打つけたりふ

らゆるとわらまらま鹿之助も夏草小尻打うけ同く  
 煙草の火と貫ひささくいりり人うまは釣網の具と持  
 かゝる目さかりき漁とまらま更生涯初見ゆる思へる  
 足下のカかりかゝる人小面會らる本望あわらむ名と  
 兼りたゝと懇懃お述べまは此者大お恐まこはけりかゝ  
 のりり子ゆる家等ハ農民ら七助と中者らり貧窮や  
 世のまらきもく漁でんやも仰のどく釣網の具と獨へん  
 手立もろく無據かやれ事と思ひ付く魚と取れ何と  
 あやれ事もいづととりり鹿之助へよく興やゝり必  
 早下りりりりりれ此身の容凡人より色まらるる名  
 乗へり懇お尋もは此男も鹿之助と凡者らり思ひ



鹿之助



早川鮎之助

鮎のすけ  
 鮎之助 釣 網の具も  
 急流と板  
 とりゆく水とせし上  
 鮎と取る

今ハかく農家ハ落ぶまに今戦國の時節先祖の名をも  
 揚人時節ハ存久も太刀一振も持ど鎧の一領もあ  
 ざれば仕官の望も絶果只魚とくう身命と懸斗ふいと  
 打三行もく述くれば鹿之助感ドて家若年うくと久も大  
 志らや家居所と求めまじ来てむらんや此者大悦び  
 も一捨多いどんバ犬馬の勞とつらん鹿之助よろこび黄金  
 一包ふかの割并古堵之助ハ渡しと片ととて出此  
 黄金うらう刀衣服と調一來てむ家ハ播州尼子式部少輔  
 のもふゆまば是と澄據ふたづむへ名も七助少てをま

早川鮎之助と名乗之  
 是尼子のと云捨く立別るまじ七助も其志と大悦家茅屋  
 と取付付獨住の気さんドハ跡より追付赤くでんと勇進人  
 歸りてあれ  
 此鮎とくう一川と鮎川村とくう今も播州海道ハ古跡を  
 残まり此七助が後胤も今中の城村てふ所ふりてくや  
 夫より鹿之助ハ昆陽の池西の宮湊川を楠公の戦死乃地  
 うれば立寄古墳を伏拜ミ兵庫の湊小着々此所を繁  
 花の地あり家居美々鋪高家軒と並べり此所の横町へ  
 人々もきしし馳行ゆりさ何事やと里人ふたづむまじ  
 喧嘩りりと云捨行と思つて人の跡に付く横道へ来々く

一人若き男の女と連なりと見えし土ふ初も伏託る体又一  
 人を六尺どりの色黒く眼大きやうわう、鬚男の立ちどろり  
 此男と討と捨たに勢なり鹿之助思ふや、是全く色情の  
 意恨なり人百年の命を是が為ふらやまう、ハ残多きや、こ  
 いざや双方と宥りも無事を計らんと中へ立入双方暫待の  
 何国の人とをまう、保も其の意趣と語て了簡う、通き筋  
 ちうく如何やうも挨拶つてんとりよふ此色白き男渡り舟と  
 得し心地あり女諸も鹿之助が袖ふとがり、場所を  
 人の難とも見ぬ貞とる人心ろり有がた、志う其を若氣  
 小う此女を浪花新町とる、浮舟とる遊女うが不斗馴  
 染主人の勘気を受ひても互ふてるきや、る心底をいひ、

此人、買論つて、據り、曲輪を出奔し、此処此人のとる  
 追う来や女と渡せとあり、おひひ、宛へとも聞入る、以  
 太刀先う受取らん、の難題、其も男を、引、つ、う、い  
 り、保とも恥しや、此女、大小、ま、う、も、残ら、ど、賣、拵、い、帯、刀  
 ら、い、せ、い、も、兩、腰、も、中、を、竹、光、う、く、い、夫、也、立、會、へ、う、り、も、な  
 ら、い、し、も、宛、い、ま、う、い、に、坐、い、わ、つ、も、所、慈、悲、に、人、不、俱、と  
 西、院、う、て、ま、い、ひ、生、い、世、の、内、恩、よ、い、と、女、諸、も、涙、お、ひ、で、い、て  
 た、の、も、う、大、男、打、笑、い、は、若、衆、朝、う、通、の、大、た、う、け、其、か、刀、楯、ふ、い  
 へ、い、此、女、や、余、程、金、子、も、い、ら、い、た、ん、く、と、う、さ、れ、其、上、曲、輪  
 と、也、落、致、と、い、い、の、う、所、と、尋、れ、や、う、く、巡、り、合、り、某、を、熱  
 井、大、五、郎、と、い、浪、人、遊、女、小、能、や、い、に、た、ま、う、ま、て、と、一、分、立、が、う、此

男と太刀先の勝負つゝ一日つても此女と女房おのゝを大  
 丈夫にのゝれをもとく釈迦如来の陀言のまゝも了簡とる  
 おあゝを西挨拶は無用なり野良め立上りつゝ勝負せよと  
 白眼付き鹿之助いへら成不ど立腹ハさるゝも彼が両  
 刀を竹光とらむば町人おも芳りゝ魂の人なりかゝ億病人  
 と相手あり手柄を以て只のり遣ハさるゝ此女も是下と  
 嬌いゝ億病人者と意慕ふ志取おたゞは是も打捨穩便よ  
 出了簡のゆかりと事と分る言けさるゝ大五郎中へ聞入  
 と某も竹光の者と立會勝負しとて手柄を以て足下もかく  
 掛と合ふ上ハ彼お一刀を借つゝハされよ真鍮の勝負して  
 討つゝと時の運則足下檢使たり其外の了簡とつゝ

鹿之助も今更詮方々白き男小向いかく挨拶つゝせも  
 聞入り此上ハ拙者ガ刀足下に借らば勝負致されんや  
 此男大よみこび誠小情なり何卒刀は貸借致し  
 と身持へゝ女おひらひ汝おへ小大もも責辨い  
 かく大勢の中めく恥辱とるも主親の罰をへ  
 只今迷ひの夢覺つゝさるゝ此人と立會冥鬼と成とも  
 罪亡り更お恨とふらひ是より家事ハ夢く心小掛  
 るひりも我も汝お心を残らぬぞといされよ述もれハ  
 女も一言のいゝとせ候と泣斗つれハ大男打つゝ  
 女がのハ心おかくゝもわつれ家受取不自由と幸に  
 ろゝは早く念佛も唱へ臨終と待べーいざ立上り

三尺二寸の大太刀引拔く待くも鹿之助刀と渡し我  
 等家の重宝菊一文字めくも心静小止立會いと言ひ  
 多れい男と刀と三度頂き有がたに志恥しなれど  
 下されし刀引拔折捨腰小帯せば大男いさ参り切  
 こつて後合せしうらうら初の柔弱小引之いけり  
 げおど見えまきりくる大男も只一討と思ひの外刀法の礼  
 しもれば大汗と涙し戦いくる此時うの女ハ目とももる  
 おとくえなれは慄くくも蹲居くるや半時斗戦ふ  
 所小いふうたど人白き男刀は打落されまきハ大男大  
 う後こび最早無刀の女觀念せしとくくと立寄所と膝  
 指抜きも見せば大男の右腕を切落しくるこハたどる

きし無念やと左の手にし指添抜んとする所と同一く  
 左の手にし打落し倒す所と立寄留りの刀はし  
 菊一文字の刀と拾ひ上心静小押ぬぐい鞘小収め謹而  
 鹿之助小渡し君の山蔭生く世く忘るはとと述るは  
 鹿之助も其早業殊小両刀竹光なりと欺し智畧と深  
 く稱し此男重て刀の切味試度ひし道具と  
 穢さんすと恐も熊と打落されいとつふふよく其志  
 ゆうしくも足下何とさかる英雄さう小婦人小まよひ  
 なつし返とくも残念さう向後心と翻して天下小英雄  
 の名と頭し多くと懇小くは此男も悦小絶と女小向  
 小前も如く我此期小及んも色念と去り真の式





薄舟

横道兵庫之助



鹿之助

兵庫之助鹿之助  
 かと借と取戻と  
 ぞぐ

身如至伴卷之三

夫と成きり 汝ハ是より 浪花へ帰て 再び曲輪にて 親方の  
命不随ふべし 縁尽どは 重く逢見ふ事も あり人早く帰る  
處しと言ふれば 女ハ且恨且悲と 更不離るゝ 気色なり  
けり 鹿之助も 其情を察し 足下の 潔き心を 頭も  
あし 婦人一人 恨華と 帰さんハいと 情を 是を送り親  
方へ 渡し 心残を 了れ 了れ 其を 山中 鹿之助とて  
播州 尼子 義久 小ゆきを 送り 行々 者あり 縁あり 尋  
み 俱く 出世と 計らんと言ふ 此男 大ふよろあひ  
此志の 程有が 今 只今 志を 改めい上と 今日 産出  
同前より 然し 情小 君我小 姓名と あり人 玉の道と 眞實  
小見え 多きハ 鹿之助 打笑い 英雄の 軍中より 名乗人よ

人並の名を 耳ふと あり 此兵庫の 横道め 難小 逢ふ  
心と 改めふも 定る 因縁あり あり人 向後 横道 兵庫  
之助と 名乗む へといふ 多きハ 悦み 限る 女を 浪  
華の 親方へ 渡し 再び 播州へ 立越 君を 尋まふ ことを 願  
う 鹿之助も 再會と 期して 播州の 急なる 浮舟と 伴い 立出れ  
鹿之助 尼子 義久 小逢ふ 并怪異を 静る 話  
斯く 鹿之助ハ 兵庫之助ハ 別別 播州路 あり 樹と 下り  
上月の 城近く あり 多きハ 旅店 小休ら 眼を 改城内 へか  
言へ 多きハ 先達 而 宗教 脚より 交通 あり あり あり 式部  
少輔 大悦 あり 早速 對面 あり あり 奥方 八重 姫君 一子 勝丸 君

と誘ひ立出ぬ鹿之助が容貌と見覽りて威風凛々  
 と天下の英雄と見え義久の悦大なるなり  
 向後妻の縁ゆき兄弟の約とけりてと宣へ鹿之助謹  
 ん其無謀の小將いふ大家の親族とていひまじくも  
 臣下と成り君と補佐し忠臣と勵み参りて人と謙言を宣  
 へれば猶更其誇らざるは稱し多し然るに後主従の孟セ  
 んとの孟と下るは鹿之助謹而頂戴し分給是より義久  
 と縁者とすりし味意なく奥方ハ猶しもさうく勝丸ハ  
 叔父と宣へども鹿之助ハ一向其心なく臣下の道を守り片  
 時も忠臣の志と違へど暮し多し爰ハ一箇の小説あり其  
 頃ハ重姫の召仕り葉末とては姫のちり多し其の程あり

色りく唯うくと物思ひ白小暮し食らども一向さうま  
 ざれば心お叶ひし葉末が奥方さめぐといふりりりり  
 ども針灸葉の驗え見えは只骨と皮のそは瘦衰へくる其  
 頃必しもの叫々ハ葉末が寐所へ夜毎ハ通ふ男あり曉お  
 ち帰ると言觸りては奥方不審しあひかく嚴重の部  
 家に男の通ふ處さ道さしとて葉末がすも只さうし終心  
 いざ様し見んと甲斐ぐくく心さうなる必と一人召連ぬい  
 葉末が寐所と伺ひさふ世満の頃と思しき頃志きり以恐  
 しく五體慄くくさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 と心とさうさう見むハ灯の影ハ十六七むかりのいと美鋪  
 小童の忽然とさうさう葉末が寐所へ来りては葉末ハ嬉し

げふ今宵といつくりよりも遅くしとつたかの美童さる  
 事のりうと夫より打伏ぬ奥方得と見詰し懐銀抜  
 ろちうけ入らんとちあひいざかく入る方もうた所へ来  
 曲者中く女の手お叶ふべくもろく得と帰るうた  
 見届んと猶息とつたうたお暁の鐘お驚又翌乃  
 夜といひうかの灯おりともむハ来る見えしが形ハ消えて  
 見えどまり多れ奥方其妖怪とて試察し翌日葉末と召  
 出し責問むへハ初の程ハ言さざしが強く責らるうた  
 いがどち庭の泉水うた夕涼の折うた十六七の美童来り  
 てわうハ懸想しこれどわづし心と厭いうた難面もてせし  
 にとびくみと送ていと節うた志と述し短冊を送りて故

其心とわづきと返りてし夜毎お通ひ来るとり  
 何国の人といふうたとうた短冊取出して奥方へ  
 さし出し取上見むと  
 たしとて言し君の恨しや河うたを我をへ  
 うたおお並の情と願し奥方いうた妖怪とて  
 うたれバ鹿之助と名て此短冊と見せり鹿之助今年  
 十八才元服して山中鹿之助幸盛と名乗寔ハ一人當千の  
 勇士と見えたる奥方の前お出さし此哥といふと考へ  
 心うたわづき此妖怪某退治仕らん心易れといひて  
 立歸り其夜掾側の板鋪へ灰をまき其身ハ遙隔て窺  
 みたれ丑満の頃うたうたに物凄く覺えたる何角兩戸



鳥羽  
 全傳  
 卷之五



鳥羽  
 全傳  
 卷之五

の方へ行音の聞えくまは猶も息試つ免物音静し  
 かの灰と見まは犬の足かざれた跡付りされば我思ふ  
 ふ違はどと待くるよ暁近き頃奥の方より立出る足音  
 こ小柴垣ふ身と寄る伺ふト七むかりの美重音も  
 両戸と明け椽より下へ飛下所と得ると組付と  
 此者ふづりの力も事とも只組まざる鹿之助を庭  
 のうへ引摺行幸盛も大に驚我あやしく力量と競ふ  
 終おうる力の者と見ど手取おせんと思は不覺ととるべ  
 と引まざる短刀抜とち右のゆづととつく大刀あつれ  
 てらと叫びけ鹿之助とを離し泉水の方へけ行ま  
 のぐとぬとと追くれぬ泉水の中へ飛も行方なりけれ

夜もなのぐと明おける鹿之助水中ときめと詠ふ緑乃  
 水紅不變し池中震動する事夥し扱られ水とくわし見  
 ては泉の傍よりろりり其中に小半の如き頼の腹  
 とつらぬき死する鹿之助打笑ひ彼がぞれ奇のま  
 あも頼とんと察しり扱く力の強き獣なりと言ふ  
 義久も奥方も鹿之助が文武と兼る感もいれ  
 ら限るし夫より兼末も次第ふ快何の障りも  
 鹿之助三日月と祈る伯州菊池こ八と討て英名は  
 顯る話

鹿之助情思ふや我天下ふ遊行して大功をうんと思ひ  
 によし色情少宗教卿ふたの手れ尾子ふ随いぬ去るら

かく安樂ふ暮とくハ何ぞ二君ハ仕ん足事とくハ聖人の道  
 かり此上ハ尼子ハ武運と祈り家も強勇ハ誓を願ふんと  
 三日月ハ立願せしに其さすく和向ハ所敵なく西国随一  
 の勇士と世に稱しり多きハ甲の立物ハ半月を付ける是三日  
 月と頭ハ戴くの心かり義久も奥方と相談ありき  
 豪傑と我等とくハ旗下ありき者ハゆき早く都より九  
 重姫と呼迎へ婚礼とす男とハ折足と成り長く家方ハも  
 通ふべしと宣ハ奥方も祝言のつと急ぎきとさし合或日  
 竟之助と呼出り此事と宣ハ鹿之助恐入我等若輩の身と  
 しく主君の妹君と娶らんハ一家中ハ姑とく終ハ我身の  
 仇となすべし一ツの功とも立家中一統某ハ帰伏つと時節も有

ん夫もくハハ待下るべしと強く辞退しければ義久も其理  
 不伏し暫くし置き置かむ後爰ハ伯耆の国山名氏資の家臣  
 菊池ハハとく大強の勇士ハ脊の高と七尺三十貫目ハ  
 鉄棒とつとす等がく海遣ふとく百人ハ動ハかた大  
 石坂ハ海とく自天下ハ敵なくと廣言しと断り夫  
 くりハそこの小城爰の取手とく軍勢と用いど只一人無二  
 無三ハ打こがら軍兵ハ殺害とく群蟻とつとく如くは  
 誰ハのさし此ハハ敵とくあるハ長州の毛利とく菊池  
 出ぬまはるハ軍勢と出さば厳しく防禦しては  
 尼子造寺も安き心多く一人のハと恐るくハ厄神の  
 如くるればハ八が傍若無人ハ振廻漫ハ民家ハ打入とめは

婦人ハ己ガ修ム妍淫ニシテハ国中の騒動ノ大ニスリ播  
州一国安シ心モナク薄氷ニ踏心地ニ暮ル鹿之助  
此事ヲ聞ク安シウシ假令ト七回八臂ヲても人間ノ  
我レ此者ハ除クハ當国ノ人民ヲ一ツツガ謀ルムル  
乙ハ怒ラセ打殺ス一ツ菊池乙ハ討ル山中鹿之助  
かりト大文字ハ徳ヲ所ク張レ置ク此事乙八ヲ聞テ  
大ニ怒リ憎キ小冠者ヲ大言ヲ一ツ踏殺ス守明人  
乙尼子ノ城内一ツ言贈ル一ツいハ尼子ノ家外山中鹿之助  
一ツふハいハいハ一ツ我レ敵對ス所クハ  
出リ若狂人ハいハ来ル幾日舞子ノ濱ニ来ル  
一ツ白眼殺シ得ル言入リ尼子義久大ニ怒リ

鹿之助ト呼出シ汝ハ大膽ナ當時長州ノ大軍ヲ率テ  
彼ト討テ人ヲ一ツいハて我等ガ城中ニ今日ハ押寄人  
翌日ハ乙ハ来ル諸卒安シ心ニ一ツ乙ハ彼ト敵  
對ス蟪蛄ハ芥ト一ツいハ向後城外ニ出ル  
事ハ彼ト敵ト一ツ色ト一ツ宣ハ鹿之助打  
笑ヒ君何ニ敵ニ英雄ト一ツいハ無謀  
の士母ハ象力ト一ツ頼ル天下ニ敵ト一ツ思フ乙ハ  
一ツ謀安シ内ニ坐シ君心ヲ安シ一ツ彼ト討テ  
方寸ノ内ニ一ツ言ヒ一ツ義久ハ更ニ安シ心モ  
一ツ暮ル叔ハ其日ハ一ツ菊池乙ハ出立一ツ  
黑糸威ノ大鏡ニ例ノ鉄ニ棒ヲ一ツ提ル舞子ノ濱ニ

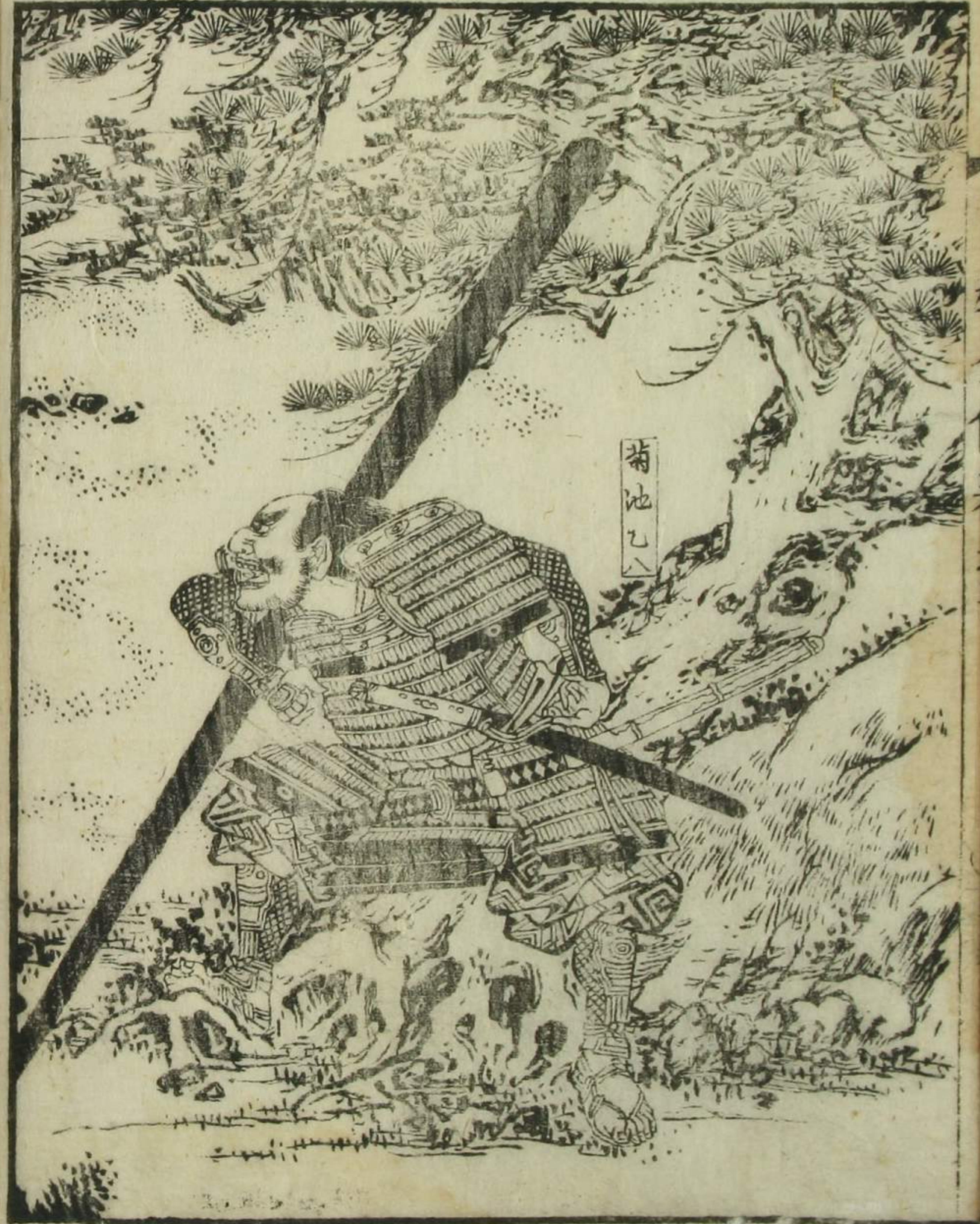


場所はあつて鹿之助遅しと待たせり鹿之助は袴のき  
 立より紅の袴をつけ菊一文字の重代と帯し懸くと来り  
 しがまげ乙八を十分怒らせんと大に笑つて汝我を小児と  
 大言と吐く甲冑と帯して来り抱腹して小絶り我は  
 汝を切るも一鶏を割るも安しとやり故に牛の刀を用  
 ひて是より今日の勝負は見えりや命と捨んより  
 向後我もさういふ長く大言吐事と止しやくを嘲嘲  
 せしむる乙八は怒らざる人憎き小冠者めが言事な  
 甲冑と帯するハ武士の常なり其儀を暫く待赤裸に  
 かりし勝負と人々鎧脱と禪の上ハ大小と膝を彼  
 鉄棒打ちりいざ参々と声かくる鹿之助飽す謀せ

彼と戦はんハ劔と打合せむバ打折らんハ必定なりと鎗引  
 ろれ立向い互ハ日本無双の豪傑なれば右へつり左へ  
 開き其早なる電光の如く爰よりとそれハ忽然とし  
 て後へおろしハも初の程ハ何程のよりんと思ひしに  
 早業の鎗法も亦もあつた突るととも度なれば  
 油断なき一時計戦ひしにいなを人鹿之助が鎗大  
 カの鉄さへ棒ハ打上らる鎗を空中におろしけりや  
 一打おろしんと思ふおろし菊一文字抜くと見えり乙八  
 が耳の根より右の肩先へ七八寸切付きハ大に驚きこハ  
 口惜と棒より直を所と二の太刀に右の肘より切て落を  
 無念くと牛の吼るごとくやうに叫ぶ故終ハ切倒し首取



山中鹿之助謀  
 菊池乙八討



菊池乙

くさし上ハ人間業とも見えざり多岐夫より家来お首と  
持せ尼子に前出さる右の次第とのくれば義久大不驚き  
誠ハ汝ハ天神なり西国一の勇士と手もろく討せり凡人  
の及ふ處きよびと稱しあへハ鹿之助完尔と笑い先小  
も上し如く力を頼む愚夫夫火鎧をぬぎ切ゆくし  
彼を欺き侍り此者討せり上ハ先山名ヶ城と責む必勝  
利つるしと諫る義久も其義ハ随ハ専ら用意とす  
鹿之助山名氏資と生捕活  
爰ハ山名宗全ガ一族ハ山名氏資とりし者なり其頃伯耆の国  
小一揆と起し所々を責取しハ菊池ハとりハ強勇の士と  
得てより天下ハ敵なりと思ひ近国を責討ハ向ふ所悉く

復し勢ハ大ハ成りしハ菊池ハハ尼子の勇士山中鹿  
之助ハ討せしより山名大ハカを落し長州ハ毛利或ハ  
龜造寺尼子悉く敵なりいづせんハ一族とつめ評定  
とす所詮手強き大名と和睦し諸方の敵と防んずり  
外ハしと評定一決しこれぞ是れハ強勇ハヤラセ  
理不尽の振廻のせし事なり此方より和睦せんといふ  
とも兼知せりしと各眉をひきあはせ此れハ鹿之助團出  
し義久の前ハ出て山名ハ亡を謀こそい某一人羅向ハ  
彼を生捕ふしと参りし軍勢と勇もろく及ばると宣  
々々バ義久大に驚汝ハ山名ヶ為ハ肉を醢して喰ん  
と思入恨あり其上一人敵城へ趣んより石と抱く淵ハ望

いざいざ 夢に留るべしと色と変じし 諫々 鹿之助も  
 必内氣づいひらるるに 臨氣夜変詞と云ふ事  
 追付吉右衛門上人と自若く 出行く夫より  
 家来一兩人と召連伯耆の国へ立越山名が城辺に宿を取  
 言入るる小早川隆景が家来清水長三郎と者之大主  
 小面會つてさん為らるる 森アと云せり氏資人  
 出しし 伺せし 一兩人の 是説客と人と早速  
 城内へ呼入る鹿之助仕濟しと悠々と入来り氏資  
 對面して 山名其人を見らるる 其骨柄天晴勇士と思ひ  
 ぬき 懇懃お礼と 其来諭尋らる鹿之助も頭城下  
 近頃兼る一人當千と頼の菊池乙八尼子が家来山中鹿

之助お討まひし 近來山名氏十方敵と成りし 勇  
 士は失ひあり 愁傷押さかり 近頃長州と戈を交  
 ちりしども 元何の意恨なり 是より泰國と水魚の因縁  
 なりし 長く近國の事と思ふ 互ふ力と合ふ此  
 事許容りし 隆景吹擧げ 近士の郎等  
 遣を告謹而述べ 山名ハ大悦小早川の懇志謝  
 らるふ詞を 何分直頼と泰とと大に喜悦の体る事  
 此神文お血判を 懐中より一帋を取出し  
 とくくと寄ると見えし 氏資を取引 敷胸のりし  
 カと當寄らば 突ん勢いし 近士の面々大に驚い 成  
 訣しつる 主人は人質お取らせり 成

其時鹿之助大音上某と誰れ思ふら尼子義久  
 忠臣山中鹿之助幸盛とよりり山名近來無法の軍以  
 人民と腦を依り其爰に來つる氏資と伴ひ主人義久  
 の前に和睦とさし民の危難と救はんられば向つりし津  
 我れ手向ひ主人と一突きどれ氏資前非と改め民と撫育  
 於てハ程々此城へ歸らんら主人と大切に思はる者ら  
 命を氣づつるとり數万人の中に  
 小兒を引提し如く悠々と立歸り小誰ら一人鹿之助に敵  
 對者も如く悠々と城外へ出でるら後漢の閔將軍吳小至  
 魯肅と引提しとかくやと恐ろぬ者ぞどれとり夫れ  
 細乗物め尼子が城中へ歸り義久大に悦ばるらにからず

大膽なるとり和らるらと且つ恐ろ且つ悦ばるら早速山名に對面しりし  
 賓客の礼をとり饗を多く山名も義久の徳を以てきし且  
 鹿之助が智勇敵對しりし難く察し長く唇齒の交はりし  
 誓詞を取りし義久大に悦ばるら家來らまり  
 伯耆國へ送らるら山名が家來らまり  
 安き心も多く案じ暮らるら氏資無事に歸り同じ且  
 尼子が厚情と述向後無二の中に心服しりし家  
 中の悦實ふら後に捕らるら此上ハ枕とやとんとみへとり  
 家中鼓腹しりしとり

繪本更科草紙後編卷之三終

